

# 昭和62年度放送利用の大学講座の番組制作報告

## <興味の流れをどう作るか>

民間放送教育協会 井出 定利\*

### 1. 62年度の番組から

(テレビ)

スタジオセットはテレビの場合、番組の印象づけとして大変重要な位置をしめる。全体として年々洗練されてきているが、「文化としての北」(北海道大学-北海道放送)のスタジオセットはドラマ的なリアリティーのあるセットで印象的であった。制作担当者からは次のような理論的な視点が出されている。「今年度のテーマは学問的には未完成の部分が多い。そこで講師の先生方と北海道とのかかわり方を大事にした。従ってセットも、先生のお人柄が少しでも出るようにした。黒板に文字を書くことも先生の人間くささが出るものとして利用した。」

また同講座ではスクーリングの会場から2本、中継録画するという新しい試みもなされた。寒気の厳しい12月の録画(12/14、札幌、出席者約100名)で、私も現場に参加させていただいたが、このようなテーマと試みによって北海道の公開講座も、また一段と地域に根ざして行くのではないかという感慨を強くもった。

美術セットで言えば「日本の建築空間」(広島大学-中国放送)の場合もテーマを意識したい感じのセットで、各回のサブタイトル(テーマ)をセットの中のプレートに組み込むなど工夫が見られ、且つオープニングの映像処理がドリーイン(ズームインではなく)の移動映像で処理しており好印象をうけた。また、主任講師ひとりによる講義内容も盛り込みすぎにならずゆったりとして聞きやすく、楽しいものとなった。

「大地と人間」(金沢大学-北陸放送)は、第5、6回を見させて頂いた。そのうちの第6回「人と海岸の出会い-千里浜海岸の保全-」は今年度の番組の中では出色のできばえであったと思う。千里浜の現状、実験(水槽内での砂粒子の動きなど)やシミュレーション、浸食防止の応用技術などが程よくかみ合っており収穫作品と言える。

「結晶:その生いたちと個性」(東北大学-東北放送)も講師の個性に支えられていい番組になったと思う。この番組の一番よかった所は、この回ではこのことがおさえられればよいという点が講師の中で明確に捉えられていたことであろう。1人で13回を担当なされたということもあろう

---

\* プロデューサー

が、とにかく盛り沢山、言葉への頼り過ぎということが起こりがちな45分という時間軸の中で、今回ではこの点がこのようなイメージとしておさえられればよいということを講師が鮮明に持つことは、番組を分かりやすくする大きな要素であると言えよう。“結晶”というような番組（平均2.3%という高視聴率）を、例えば一般の主婦が見ているという風景を想像すると、放送公開講座の一つの可能性を感じることができると言えよう。

今年度は各地のスクーリングにも出席させて頂いた。その中では「農業新戦略」（信州大学－信越放送）「健やかな老後をめざして」（高知医科大学－四国地区）の様子が印象に残っている。共に地域実践型（信州大学：プロ・マニア向け、カルチャーっぽくない、高知医科大学：全国屈指の高齢者地域で、老年医療に携わるパラメディカルの人を主とすることを考えた）ともいうべきねらいで、会場には熱気が感じられた。反響が大きいことは制作担当者にとって青春をとり戻す最もよい音楽である、とかつて私は書いたことがある。信越放送の小林晋作プロデューサーは書いている。「（スクーリング会場で、ある熱心な受講生の話を聞き）こんな話を聞くと番組制作者冥利につきる」と。

進行役でありインタビュアーであり、且つ聴講生でもあるアナウンサーの扱いは、要か不要かも含めて毎年問題になるところであるが、アナウンサーの質問がより適確になったという印象を受けた番組がある。「変動する地球」（新潟大学－新潟放送）「沖縄の医療と保健」（琉球大学－沖縄テレビ放送）がそれである。特に前者の場合、質問者の態度が堂々としていたことも印象に残っている。新潟大学の主任講師藤田先生が、素材を少なくして理解度を高める工夫を目ざしたと発表なされているが、そのような努力と局スタッフの内容についての勉強の現れであろうと思う。

アナウンサー（進行係）の件は、毎年問題となる。難しい問題で簡単には解決がつかないが、これは局制作者の責任と言える問題であり、演出的なスタンスも含めて根本的な問い直しが必要の時のようなものである。

その他「自然のしくみ－化学の眼－」（大阪大学－毎日放送）のうち、第6回を面白く見させて頂いた。自然科学系の番組をわかりやすく見せるという方法に一つの示唆を与えられた。これについては後述したい。

#### （ラ ジ オ）

ラジオでは「性を考える」（広島大学－中国放送）が異色で反響も大きかったように思う。性は男と女のコミュニケーションのいい手段である——というあたりが講座全体を通じての結論であったように思われるが、スクーリング（1/31、福山市）でも、こういうテーマを大学がとりあげた勇気をたたえ、女性出席者からは、このテーマに沿ってパートⅡや女性学などをとりあげて欲しいとの声も多く出ていた。

「性」はきわめて個人的な問題にかかわるテーマで、講義の中にもきわどい言葉が入る。同時にまた大変普遍的なテーマでもあり、社会的文化的な奥行きを持つ事柄でもある。しかし、日本人は一般に性について語る手が下手であるように思われる。まして公けに語る時には照れてしまった

りして、なかなかうまくいかない内容であるが、ラジオであったからこそできたのかもしれない。

これについて考えると、ラジオの場合映像のない自由さということをもっと利用していいと思われる。例えば「現代青年のライフスタイル」(新潟大学-新潟放送)で非行少女のインタビューが事例として出されていたが、こういう、言わば社会の病理現象を通して人間について考えるというような内容も、ラジオだからこそ可能であったとも言える。ある有名なテレビタレントがラジオドラマに出演して、映像のない自由さが大変楽しかったと語ったことがあるが、ラジオの場合、この映像がないということを利用して武器としてテーマなり、構成、演出なりでもっと自由な展開が試みられていいとも言えるだろうか。

尚、各地のスクーリングに出席して受講生の声を聞くと、テキストを棒読みする講義は不評を買っていたようである。こういう中で、新潟放送の対面プロデューサーの次のような報告は大変参考になる。

「各講師に原稿読みでなく、メモだけで話していただいた。ご面倒をおかけしたが、自然の語り口がラジオに欠かせない聞きやすさの条件だからである。」

## 2. シンポジウムの試みから 「生涯学習と大学教育との接点を求めて」

今年度は熊本大学と熊本放送のご努力により、実験的にもう1本番組を作るという試みがなされた。

- A. 台所の科学「野菜は文化財」
- B. 台所の科学「野菜の形態学」

シンポジウムでの詳しい討論の内容は他に譲るとして、次のような意見や感想が出されていた。

- Bは大学での講義の写し換えの感じが強く、且つ単調で盛り沢山過ぎた。Aは大根畑とハマダイコンあたりにもっとウエイトをかけてもよかったように思う。
- 「野菜は文化財」の中から、もう1本作ってほしかった。比較がむずかしい。
- BはAに比べて意図不明の感じがある。

—等々。

恐らくこれらの批評は当たっていると思われる。と同時に、大阪大学の水越先生が次のような発言をなされたことも印象に残っている。「このような試みをされたことに心からの敬意を表します」と。これも又私は同感である。A、Bについて視聴グループでのアンケート調査や感想は、その報告をご覧頂くとして、以下は私の感想であり、私見である。

—ならば、お前はA、Bどちらを選ぶのか？ 生涯教育と大学教育の接点として、或いは大学講座の放送番組としての可能性からして—。Bである。

その理由の第一は、新しい発見があったこと—である。これは私に限らず、この調査研究グループの大塚助教授(放送教育開発センター)がまとめて下さった調査結果でも特徴的である。

(平均値、有効回答数以外は、%)

質問項目		番組		グループ × 番組					
質問内容	カテゴリー	A	B	一×A	一×B	熊×A	熊×B	放×A	放×B
Q8(12)	平均値	1.73	1.47	1.38	1.41	1.87	1.48	1.59	1.47
新しい発見 があった。	有効回答数	215	279	48	44	140	199	27	36
	1. 同意	49.3	64.5	70.8	68.2	40.7	63.3	55.6	66.7
	2. やや同意	35.4	26.2	25.0	25.0	39.3	27.1	33.3	22.2
	3. やや不賛成	8.8	7.5	0	4.6	12.1	8.0	7.4	8.3
	4. 不賛成	6.5	1.8	4.2	2.3	7.9	1.5	3.7	2.8

(第5回放送利用の大学公開講座シンポジウム、第2セッション資料より 本書P.297参照)

第二は、Bには“何故か、或は、何故ならば”という視点があったことである。現行の放送公開講座は何故か、どうしてかという過程を省略して結果だけを追って行く感じの番組が多い。短時間に、ある効果を上げるには有効な方法であるが、理解を深めるかどうかということになると疑問が残る。特に大学教育にも使えるものとなると、この“何故か”という視点が必要になってこよう。何故ならば大学教育の一つは、理学系、文科系を問わず質的な違いこそあれ、大なり小なり何らかの形でこの“何故か”という視点に立って、それを定量化して行く手法を学ぶことではあるまいか。

60年度のシンポジウムでBBC制作の「飛ぶ鳥のメカニズム」(イギリスのオープンユニバシティの学習素材)が視聴され、見た人に感銘を与えたが、そこで話題になったのは、ある目的に向って物事を究明し定量化して行く過程の努力が画面に見られること(こういう映像づくりがオープンユニバシティのコンセプトか)であった。大学教育との接点として考えるならば現行の番組の中に、例え一部でもいいから何故か、何故そう考えるのかという視点を持ち込むことが必要であることのように思われる。放送公開講座の可能性の上でも。

しかし一部でもとは言っても、例えば医学系の内容や先端科学技術の話などは“何故か”の内容自身が高度過ぎて、一般の理解を越えると思われるし、その番組構成は容易ではないが、番組をいい意味で活性化する要素にはなるのではあるまいか。

第三は、講師自身が包丁を持って野菜を切りながら見せるという面白さである。このような画像づくりにおける主調部分の設定や、面白さが自然科学系の番組には特に大事のように思われる。講師が次々と野菜を切りながら話す、という一種の情緒的な流れ、いわばウェットな流れを基底につくり、そこに学問的知的な情報を載せて行くという方法が有効であるということ、Bの番組は教えてくれたように思う。このことについては又後でふれたい。

### 3. まとめとして

— 興味の流れをどうつくるか —

最後に今回のシンポジウムの内容をふまえ、ここで自然科学系の番組づくりについて私の考えを少しまとめてみたい。

#### 1) テレビもラジオも放送メディア的な尺度を持ち込みたいこと

定量的扱いとは一つの尺度を持ち込むこと、と仮に定義するならば、テレビ的な尺度なり物差しの発見が大変大事なことのようと思われる。例えばごく身近なことを例にとれば、あるモノの背の高さが〇メートル△センチだという時、もしそれが人の背の高さ位であると言い替えても問題がなく、且つそれによって論理（講義）の内容が進められて行けるならば、それをテレビ的な尺度（或は例え、置きかえ）の持ち込みと言うわけである。

昭和62年に、超新星の爆発によって生じたニュートリノという極小粒子の影を、神岡鉱山の地下で東大研究班が捕えたというニュースが話題になった。超新星の爆発は南半球の空のマゼラン星雲の近くで起ったと報じられている。それならば、その粒子がいかに小さいものであれ、地球の中を通過して北半球の地下で捕えられるということが大変不思議に思われる。これに対して、ある科学者が次のような説明をしてくれた。原子の姿を東京の山手線に置きかえてみれば、環状線（電子の通り道）の中央にうさぎ一匹（原子核）を置いた位のものである。つまり、地球は原子的に見たらスカスカなのである。だからニュートリノのような極小粒子は通過して来れるのだ。このような説明は、テレビ的な尺度の持ち込みとっていいであろうし、イメージが鮮烈にくる。つまりよく分る。このような尺度の持ち込みは、或は言い替えは、「精確さ」は失われるにしても、全体的的を射るような「正確さ」が失われなければ、テレビという道具による自然科学系の番組の活性化につながって行くのではないかと思われる。

今年度の事例でいうと「自然のしくみ—化学の眼—」にそのような視点が見られる。例えば第6回「元素・分子を分ける—化学の世界」は、こんなキャプションが並ぶ。「結びを解く—物質解体」「旅に出る化合物—クロマトグラフィー」等。そして講師が例え話で表わした図解を使って分子の動きの説明を分かりやすく話してうまいと思った。内容が学問的で高度になるほど、テレビ的尺度の持ち込みは簡単にはいかないであろうが、そういうものを見つけ出すことは、ひとつの表現方法の創造であると思われるくらいに大事なことのようには思われる。

#### 2) 先ずウエットな流れをつくる？

（映像もラジオもウエットなものがよく似合う？）

今年度放送教育開発センターで行われた大学放送教育研究シンポジウムで、藤田恵壘氏から次のような研究が発表された。“画面への関心度とテストの出来具合には非常に高い相関がある。いいかえれば、面白く引きつける場面は多くの情報が容易に自然に入力されやすいことを示した”（MME研究ノート、1987、44、教育番組のタクソノミー開発「番組分析と視聴行動の分析」）

つまり、面白い場面では記憶力も上るということである。好きこそものの上手なれ、であり経験則として我々も日常感じていたことであるが、その相関関係が一つの実証例として発表されたことは興味深い。

それでは、面白い場面と記憶を、どう組み合わせるかが個々のディレクターに問われるわけであるが、私は次のように考えている。図式的に言えば、先ず構成の主調低音としてウェットな流れをつくり、そこに科学的定量的な情報をのせて行くという考え方である。ウェットな流れとは、美しいとか笑いと、感動とか或は人間くささとか面白さとか、感性的な湿りをもった内容のものであり、いうなれば前頭葉の働きに相当するような番組の構成要素である。そういう、いわばウェットな情動的なものは、テレビや映画も含めて映像に乗りやすいと思うし、ラジオの場合もまた然りであろう。この流れに大学講座として必要な情報（側頭葉に相当する要素）を舟のように載せるなり、ちりばめて行く、ということである。

このウェットな流れを作る方法として、一つは歴史的な視点をいつも取り入れるという方法がある。歴史的にせよ、個人史にせよ、人がどう考え、何を見つけて現在に至っているかをたどると、高度な理論や概念でも理解されやすいようである。その発明やら発見の過程は大変人間くさいドラマを含み、ウェットな流れの設定には格好な材料のように思われる。これに関係したことは、以前に発表もさせて頂いたので、そちらに譲らせていただくとして、今回の放送利用の大学公開講座シンポジウムで視聴した日本賞作品「ローレンツ変換の話」にもそれは感じる事ができる。感じる、としたのは作品の内容が物理学上の最高峰のことなので、私には批判能力がないからである。しかし、その構成の運び方について図式的に言えば、ガリレオ、ポアンカレ、ローレンツ、アインシュタインと歴史的な発見の視点を主調低音（ウェットな流れ）として、そこにCGなどによる情報を盛りこんでいたように思う。

歴史的な視点を持ちこみながら、その視点がうまくとけ込まずに、惜しかったな—と思われた番組もある。「結晶」の第9回（固・液の界面、成長にとって唯一の場所）である。コッセル、ストランスキー、バートン、フランク等の人々の名前があげられ、その考え方を紹介しながら内容を進めているのであるが、内容と平行的な扱いに終わっており、むしろ番組としては不要であったと思われた。しかし、講師の砂川先生がそういう人々の名前をあげざるを得なかったのは、前記の人々の上に結晶学上の発見に伴う感動の線を見ていたからであろうと思う。その歴史上の感動の線が語られながら（即ち、この線によってウェットな流れがつくられ）、その線（流れ）の上に講師の考え方も数式も載せられて行ったならば、尚よかったであろうと惜しまれる。

二番目の方法は“その他の試み全て”でくるしかないが、再び前記のシンポジウムの試みA、Bの番組に戻って言えば、Bには講師が包丁で次々と野菜を切っていくという面白い流れが基調にあったと思う。この面白さが、とにかく番組の牽引車の役目を果たしていたと思われる。Aの番組にはその流れが不透明であったように思う。

しかし、テレビ的な尺度の発見にしる、ウェットな流れをつくるにしる、いずれも局サイドの努力と制作手腕が問われるところである。